

Fate///EXTheuR—gear

あんころもちDX

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

西暦1999年、幾回にも及ぶ魔術師同士による聖杯戦争。あまりにも熾烈な戦いにより敗者の屍の山が築かれる一方で未だに勝者は現れず、聖杯は出現と消失を繰り返していた。年々激化する聖杯戦争の被害はインターネットの普及及び発達により隠蔽するのも難しく、徐々に民衆の間であくまでも『都市伝説』として流布され始めた。そのため、魔術における『神秘』は衰退の一途を辿り、いずれは崩壊する予兆が見え隠れしていた。

しかし、地方都市の『夏川町・星ヶ孔跡地』において、ある特殊な霊脈が発見される。それは過去に月の欠片が夏川町の山奥に隕石として飛来した際に形成されたものであり、『月の隕石』は1つの魔術炉に匹敵するだけのエネルギーを秘めていた。

その途方もないエネルギー源を確保すべく、ヨーロッパを中心に勢力を伸ばしている『西欧財閥』は2人のフリーランスの魔術使いを雇い、日本に向かわせた。

一方で衰退しつつある神秘を守るため、その最後の砦とも言える月の隕石が西欧財閥の手に渡ることを防ぐために、『魔術協会』三大部門の内の一つである『時計塔』は3人の魔術師を仕向けるのだった。それだけではない。

神秘の衰退に伴い、西欧財閥に吸収されつつある『聖堂教会』もまた密かに聖杯戦争への参入を狙い暗躍する。

こうして、魔術協会、西欧財閥、さらには聖堂教会まで参入した聖

杯戦争は一体どんな結末を迎えるのか……。

後に“禁忌の聖杯戦争”と呼ばれる事になる忌まわしい7つの夜が幕を開ける。

これは主人公『明日空 駆狼』が駆け抜けた7日間の、夏の思い出。

目次

【Seventh Nova】

1st Night 【異変】

1

2nd Night 【怪異】

24

【Seventh Nova】

1st Night 【異変】

——ふと、思い浮かぶのはいつも同じ。目の前に広がるのは、遺伝子の渦。

渦は螺旋を描き、虹のような模様を呈しており、所々から砂が零れ落ちている。

地面へと落ちたそれらからは、赤ん坊の泣き声が聞こえてくる。どうして選んでくれなかったのかと、怨嗟にも似た感情が沸き上がってくるのだ。

しかし渦は回り続ける。不要な部位を削ぎ落とし、真に優れたものだけを選別していく。

そうして遺伝子はやがて少しずつ少しずつ、ヒトの姿を形作る。自分は望まれた存在だ。望まれて生まれてくる存在だ。望まれるままに生まれ育ち、望まれた自分になるべく調整された存在だ。

地面の砂を踏みしめる。声は怨嗟から悲痛なものに、嫉妬を帯びたものになっていく。

——どうして、どうしてお前が選ばれてオレが捨てられるんだ!! 捨てられたそれらの言葉が理解できない。なぜ彼らはそんなに選ばれたいのだろうか。

なぜそんなに生を渴望するのだろうか。

これから自分は生を受け、外の世界へと歩みを進める。

オレをデザインした両親のもとで、両親の望むままのオレとなるために。

——ああ、オレは、一体……何のために

——ピンポーン——

「……………ん」

朝。目覚めるのは自分の部屋。誰かが押した自宅のチャイムの音で目が覚めた。

カレンダーを横目に見て日付を確認する。

今日は1999年の7月1日。木曜日だ。

——ミーンミーン——

耳を刺すセミの音と額から滴り落ちる大粒の汗。例年を越える夏の暑さが否応なしに体に襲いかかってくるのを痛感する。

周りを見渡せば全体が白く設定されたマンションの一室。家具は一切無く、カーテンの隙間から差し込んでくる日の光に思わず眉間に皺を寄せた。

壁に背を預けた状態で眠っていたらしい自分は未だに働かない頭で目覚まし時計に手を伸ばし、そのディスプレイに表示されている数字を見つめる。

時刻を確認すれば、朝の七時。

高校のホームルームまであと二時間。気だるく重い体を起こすと頭の鋭い痛みに襲われる。

「——痛つ……。また、あの夢か」

選ばれなかった自分の怨嗟の声。決してこちらを直接害することはないが、それでも機会さえあればこちらに襲いかかってきそうな雰囲気だった。

黒い泥、その中から這い出そうとヒトの形を成そうとし、しかしすぐに崩れ去る。その様子は禍々しく、同時に薄気味悪さもあった。

この世に生を受けてから何度も何度も夢に見る。そして決まって激しい頭痛と共に目が覚めるのだ。

——どうして、どうしてお前が選ばれてオレが捨てられるんだ!!

「別に、選ばれたかったわけじゃないさ」

誰に対して言いたいわけじゃない。ただ、心からの本心を思わず溢してしまっただけだった。

「……」

——ピンポーン——

再び、チャイムが鳴る。こんな時間に自分の家を訪ねてくる物好きがいるとすれば、恐らく二人だけだろう。

自身の傍には昨日の内に用意しておいた制服と鞆があるのを横目で確認して、重い気持ちを振り払うように立ち上がった。

「さっさと準備するか……」

私服を脱ぎ捨て高校の制服を身に通し、再度鞆には必要最低限の教材が入ってるのを確認。

備蓄してるカロリーメイトを口に含んで数回咀嚼して飲み込み、すぐに歯磨きを5分程かけて顔を洗う。

時間にすれば10分少々の準備を終え、玄関のドアに手をかけた。

「……行ってきます」

この家には自分以外誰もいない。両親は自分が幼い頃に既に他界してしまっただからだ。

しかし、幼い頃からの習慣からか無意識にそんな言葉を口にしてしまう。

そして、手に取ったドアノブを捻って少年『明日空 駆狼』の今日という一日のスタートが切られたのだった。

「おはよう、 駆狼！」

「……おはようございます、水芭先輩。——つてあれ、影狼はいないんですか？」

朝日を背に元気よく声をかけてきたのは『水芭 蘭花』。いつも笑顔を決やさず、長い髪を一つに纏めた活弁そうな少女だ。

彼女は駆狼の家の隣に家族と共に住んでおり、駆狼の事を小さい頃から何かと世話を焼いてくる。駆狼にとつての幼馴染で一つ年上のお姉さんなのである。

駆狼にとつて、家のドアを開けばいつも見るのは二人の幼馴染の顔。蘭花ともう一人。

それが一つ見当たらないことに少し肩透かしを食らう。

「うん。影狼くんは生徒会の仕事があるから、先に学校に向かったみたい。……そんなことより」

蘭花は駆狼の言葉に頬を膨らませる。

「もう、『水芭先輩』じゃなくて昔みたいに『蘭花お姉ちゃん』って呼んでつっていつも言ってるじゃん！」

「いえ、先輩は先輩なので。それにこの年齢になってお姉ちゃんって呼ぶのはこう……恥ずかしいというか」

こちらの呼び方に不満を抱く蘭花には悪いが、駆狼にも事情がある。

蘭花は学校では容姿端麗運動神経抜群と男女問わず人気者で非公式のファンクラブまであるほど人望がある。

こうして朝に一緒に登校できるのも幼馴染という事でなんとかお咎めなしで済んでいるが、これが下の名前で呼ぶものならすぐさま放課後に呼び出しがかかるだろう。

それはなんとしても避けたいのだ。

「絶対、卒業までに『蘭花』って呼ばせてみせるんだから！」

「何がそこまで水芭先輩を突き動かすんだ……」

「そりゃあもう、ここまで来たらただの意地つてもんよ!!」

そう駆狼からすれば迷惑極まりない決意を固く誓う蘭花に辟易しつつも、少しだけ笑ってしまう。

年月と共に自分と彼女の関係性は少しずつ変わっていったけれど、こういう何気ない会話から感じる『変わらない』という部分に少しばかりの安心感すら感じる。

「そういえば、高校生になって三ヶ月ぐらいになったわけだけど、今のクラスには慣れた？」

「うん。クラスの連中は皆優しいし、とても楽しいよ」

駆狼がそう言うと、蘭花は「良かったあ」と安堵の声を出した。

「駆狼がちゃんとクラスに馴染めるか、お姉ちゃんはそればかりが心配だったよお」

そんな事を言う蘭花に対し「あはは」と笑い声を漏らし、悟られないように表情を笑顔で取り繕う。



嘘は言っていない。自分が所属するクラスの面々は皆優しく、彼らは毎日楽しく日々を過ごしているのだろう。

ただし、そこに自分は含まれないが。

というよりも、自分がそこに加わる事に意義を見出だせない。自分抜きでも彼らの世界は問題なく廻り、機能していく。

それはあまりにも自然で、下手に自分が手を出してまで破壊したくないと思ってしまうほどに。

蘭花は駆狼にとっても大切な幼馴染だ。だからこそ、彼女に余計な心配をかけたくない。

「……………」

そんな時だ。

ふと、強い視線を感じて足が止まり、思わず後ろを振り返った。

「どうしたの、駆狼？」

怪訝そうにこちらを見つめてくる蘭花。駆狼は首を振って笑顔を取り繕う。

「ううん、なんでもない」

——まただ。

——また、あの視線だ。

蘭花には笑顔で言ったが、このところ、ずっと感じているものだった。

鋭く自分の背中を射抜き、決して逃がさないと言わんばかりの執着すら感じられる。正直に言えば、気味が悪いとしか言いようがない。

しかし今まで特にこれといった実害はなく、変わらぬ日々を過ごしている。

どうか、今日も何事もなく、平穩に過ぎることを願うばかりだ。できることなら、明日も明後日も、そうであってほしいものだ。

「本当になんでもないの？」

蘭花がこちらを心配するように瞳を合わせてくる。

駆狼は蘭花が合わせてくる視線から少し外しながら曖昧に笑う。

「うん、本当に大丈夫だから」

疑いの目を向けてくる蘭花に対してあくまでも平静を装う。こう

やって昔から蘭花に必要な以上に心配させないようにしてきたんだ、もう慣れたものだ。

「——あっ……………」

だが、それでも思わず声が漏れてしまった。蘭花はその隙を見逃さなかつた。

駆狼に向き合うように顔を近づけてくる。

「あー！ やっぱり何かあるんでしょ!!」

「え、いや、その……………」

蘭花に対して愛想笑いを浮かべて、一瞬だけソレから目を逸らした。

「そうじゃなくて、屋根に——」

「屋根？」

蘭花は眉間に皺を寄せて駆狼の視線を辿るように後ろを振り向く。

木造の家が並ぶ住宅街の道、駆狼の言うように家の屋根を注視するが、特に何か違和感があるわけでなく首を傾げてしまう。

「屋根がどうしたの？」

「……………」

駆狼は無言だったが、視線を戻した際に目を見開いた。一瞬だけ目を逸らしたその間に、ソレはまるで最初から何事もなく消えていた。

ソレは白い髪と赤い目を持っていた。

ソレは駆狼を観察するように見つめていた。

ソレは民家の屋根に腰かけながら、見つめていた。

何の感情もなく、何の望みもなく、何の息吹きもない。

まともな生物じゃない、見てるだけでゾツとしてしまうような感覚が身体中を駆け巡った。

「ううん。少しだけ、気になる——猫みたいなのがいたんだよ」

だが、駆狼にとつてその感覚は決して不快なものじゃなかつた。むしろ、心が渴望しているような欲求さえ沸き上がってくる。

「ふーん、猫ねえ。駆狼が気になるぐらいだから、きつと凄い綺麗だったのかな」

「綺麗…………うん。綺麗だったよ、凄く。白くて、赤い瞳が」

何も感じさせない禍々しいくらいに濃く赤い瞳が、とても純粹で、堪らなく魅力的だった。

その後は、何の滞りもなく、他愛ない会話をしながら彼らの通う学校へと向かった。

彼らの住むこの『夏川町』は四国地方の片田舎に存在する小さな町であり、全体面積の8割近くが山林で囲まれた自然豊かなのが特徴である。

特産品は土佐茶、場所の見所としてはかつて隕石が落ちたことで形成された巨大クレーター『星ヶ孔跡地』が観光場所として有名である。そうして歩くこと約15分、彼らは自分達の学舎である『集命高校』に到着した。

規模は生徒総数450名と小さいものの、山に囲まれた自然溢れる学校である。ただ、年々生徒数が減少傾向にあり、廃校になるのではという話がチラホラと出ていたりする。

「お。蘭花姉さんに駆狼じゃんか！ おはよう！」  
すると、駆狼と蘭花の元に少年『さくや遯夜 影狼』が駆け寄ってきた。彼は二人の幼馴染であり、駆狼とは学年が同じであるもののクラスが違う。

気さくな性格と爽やかな見た目から、蘭花と同様にファンクラブがあったりする。現に今も多数の女生徒に囲まれていることから、その人気伺える。

駆狼と蘭花はそれぞれ影狼に対して朝の挨拶を返す。

「おはよう」

「おはよう、影狼くん！ 今日も相変わらず人気者だね！」

蘭花のその言葉に「あはは……」と苦笑いしながら周りの女生徒達に「ちよつと彼らと話があるから、また後で」と言い聞かせて彼女達を立ち去らせる。

その様子を見て駆狼は尋ねる。

「影狼、いいのか？ 何か彼女達と話してたようだけど」  
「いいんだよ」

駆狼の問いに影狼は肩を竦めながら言う。

「毎回毎回群がってくるんだ。正直な話、僕からしたら迷惑でしかない」

うんざりしたような声に対し、蘭花は「あー！」と影狼に指差す。

「影狼くん、女の子をそんな虫みたいに言っちゃダメだよ！」

「虫だなんてそんな大袈裟な。それに、もし虫みたいな発言に聞こえたのだとしたら、虫は虫でも美しい蝶としてですよ」

「もう、口ばかり達者なんだから！」

そう言うと、蘭花と影狼は互いに笑い合う。なんてことはない、幼馴染同士の軽口の言い合いである。

「それにしても、今日は早いなだね。早朝に生徒会の仕事をするなんて珍しいよね」

いつもならば、駆狼と蘭花と影狼の三人で登校するのが習慣なのだが、今日は影狼は早朝に生徒会の仕事があるために二人と登校できなかった。

その事に対して、影狼は申し訳なさそうに頭を下げる。

「ああ、はい。今日やってくる転校生との顔合わせがありました……すいません」

「ふーん。それで、もう顔合わせは終わったの？」

「ええ、先程終わりました。……あ、そうだ」

影狼は何か思い出したように駆狼の方に顔を向ける。一方の駆狼は首を傾げる。

「駆狼。件の転校生なんだが、お前のクラスの所属になりそうなんだ。色々と面倒を見てやってくれないか？」

「そういう事なら、分かった」

影狼の言葉に素直に頷き了承すると、影狼は「助かる」と安堵の声を漏らす。

「それと悪いんだが、可能なら放課後にその転校生に校舎内を案内してやってくれないか？」

「ちよつと、影狼くん？」

蘭花はジト目で影狼を睨み付ける。

「駆狼は放課後にバイトがあるのよ。それに、そういうものこそ生徒会長様の仕事なんじゃないの?」

「いや、これでも生徒会の仕事や剣道部としての部活動が立て込んでまして。特にうちの部活の他校との練習試合の日程調整が多くて……」

影狼が蘭花に言い訳がましく理由を並べていると、駆狼は「構わないです」と淡々と述べる。

「放課後のバイトまで時間がありますから、いい時間潰しになりますよ」

「えー、ホント?」

蘭花は駆狼を訝しげに見つめるが、駆狼はあくまで「問題ないです」と意見を曲げるつもりはない。

すると、「蘭花ー!」と蘭花を呼ぶ女生徒の声が校舎の二階の窓から聞こえてきた。

「あんだ、今日日直でしょー!」

「……あ、忘れてた」

どうやらクラスメイトのようで、蘭花は顔を青くする。

影狼は「やれやれ」と肩を竦める。

「駆狼の事を気にするより、自分の事をもっと気にした方がいいんじゃないですか?」

「うぐう……。覚えてなさいよ、影狼くん……」

蘭花は悔しげにそう漏らしながら、「今行くー!」と校舎内に駆け込んで行った。

一方、残された駆狼と影狼は互いに向き合う。

「ところで、駆狼。蘭花姉さんじゃないし、頼んだ側としてはなんだけど、本当に放課後に校舎内の案内を引き受けて大丈夫なのかい?」

「ああ、問題ない」

「とは言うけど、部活の助っ人も頼まれてるんじゃないやなかったか?」

「……」

無言で押し黙る駆狼に、影狼は「相変わらずだな」と嘆息する。

「それも、時間があるから問題ないと言うつもりか?」

「……ああ。帰りのHR終了から部活まで30分あるから、20分で校舎内を案内すれば何も問題はないだろう?」

「……断ればいいだろ。それで全部済む話じゃないか、お前一人に負担を強いたって何の意味もないだろうが」

駆狼は眉間に皺を寄せた。影狼の言葉がまるで理解できなかった。

「影狼、お前も言ってたじゃないか。どこの部活も他校との練習試合に勝つために戦力を必要としてるんだ。うちの学校はただでさえ人数が少ないわけだし」

「だからこそさ。お前一人に頼らなきや勝てないような弱小校の部活に、何の意味があるって言うんだよ」

「意味ならあるさ」

駆狼は小さく笑いながら、自分の心情を述べる。

「皆はそれでも『勝ちたい』と……そのために俺という存在を必要としてくれてるんだ。その願望<sup>おもい</sup>を、俺は無下にはできないし、したくない」

そのあまりにも迷いのない言葉。それでいて、歪な言葉。

何とも言い難い表情を浮かべる影狼は「はは、そうかよ」と鼻で嗤う。

「お前がそこまで言うなら、僕からこれ以上何か言おうとは思わないけど……。ま、その病気染みたお人好しをどうにかしないと、本格的に身体を壊す事になるよ」

「ああ、善処するよ」

善処する、そう口で言いながら幼馴染にはその気が全くない事を影狼は知っている。

幼馴染なのに、コイツには蘭花の言葉も自分の言葉も届かない事に、思わず拳を強く握り締めた。

「なら、僕はこれで失礼する。そろそろ朝のHRだしね」

去りながら、もう一つの苛立ちの理由が脳裏に過る。蘭花の顔が思い浮かんだ。

(――駆狼は呼び捨てで、僕は影狼くん、か……)

同じ幼馴染なのに、蘭花の関心はいつだって駆狼の方を向いてい

る。

自分だって、駆狼と同じだけの時間を彼女と過ごしてきた筈なのに、それがどうしてここまで差ができてしまったのか。

駆狼が無茶をする度に蘭花は心を痛める。それが、何よりも許せなかった。許せるわけがなかった。

「僕は、お前の『影』なんかじゃ……ない」

ところ変わって駆狼のクラス。既にクラス内でも転校生が来る事が伝わっているのか、騒然としている。

男子側は「転校生は女の子なのか？」「だとしたら可愛いのか」だったり、女子側は「イケメンだといいなー」と笑っている。

そんな中、後方の窓際の席に着いている駆狼は興味なさそうに窓の外を見つめている。

考えているのは、今朝の事。蘭花と共に登校中に見かけた、あの存在。

民家の屋根の上に腰かけていた——あの少女。日本人離れた西洋系の顔立ちに雪のような白い髪と白い肌。

そして何よりも駆狼が強く惹かれたあの赤い瞳。血のような濃い赤で、白い髪と肌がそれをより強調しそれでいて——その瞳には何も無かった。何の感情も、何の意志も、何の願望すら無かった。

それが、とても悲しくて、美しかったと感じた。

「えーと。知ってる者もいると思うが、このクラスに転校生がやって来る事になった」

すると、一ヶ月前から駆狼のクラス担任を勤めている新任の『榊田ますだゆみと』が教室に入室した。

少し日焼けした爽やかな容姿をした男性で、担当科目は数学から体育まで何でもござれなため、慢性的な人材不足である集命高校の教師

陣から大変重宝されている。

性格も明るく、老若男女問わず人気者な先生である。

そして、そんな弓人の傍には一人の少女がいた。恐らく、彼女が件の転校生だろう。

転校生の姿を見たクラスの面々は「おお……っ！」と感嘆の声を漏らした。

弓人は転校生に言う。

「名前を黒板に書いて皆に自己紹介しなさい。……あ、名前はアルファベットじゃなくてカタカナで頼むよ」

「……分かりまし、た」

少女はたどたどしい口調で頷くと、黒板に自分の名前を書いていく。チヨークの音が教室に響き渡る。

名前を書き終わると、クラスの面々に振り返って口を開いた。

『グレーテ・レーナ・フランツィスカ・クロイツェル』で、す。長いので、『グレーテ』と呼ん、で、下さい。よろしく、おねがい、しま、す」

頭を下げ、そう言う少女——グレーテにクラスの面々は控えめな拍手を贈る。

「クロイツェルはドイツからやって来て日が浅いため、まだ日本語が不慣れなんだ。少しずつ慣れていくためにも、クラス皆で彼女を支えてほしい」

そこで弓人は後方の窓際の席に目を向ける。何かに想いを馳せて窓の外を見つめている駆狼を見て小さく笑う。

「そういうわけで、クロイツェル。後方の窓際の空席に座ってくれ」

グレーテは頷くと、静かに歩きだして駆狼の席の隣に立つ。

「明日空。クロイツェルの事、色々サポートしてやれよ」

名前を呼ばれ、駆狼は窓から視線を外して周りを見る。クラスメイトの視線が自分に集まっており、そして——。

「……っ！」

「よろ、しく」

グレーテに話しかけられ、思わず顔が強ばる。



あの時の、赤い瞳とまた目が合った。

「……よろしく」

駆狼の言葉を聞くと、グレーテは席に着いた。

(彼女は、今朝の……)

今一番気になる存在。登校中に目にした少女。

それが何の因果か、駆狼のクラス、駆狼の隣席に現れたのだった。

時は経過し、放課後。

授業中は隣席という事もあり、グレーテに教科書を見せたりし、滞りなく一日は経過した。

グレーテも特に問題行動を起こすわけでもなく、まるで今朝の事は何も無かったかのようにすら感じる。そう、登校中に見かけた彼女の姿は自分の幻覚だったんじゃないかとすら思えてくる。

そう思いながら、駆狼はたくさんの女生徒達に囲まれているグレーテに目を向けた。

どういう経緯で日本にやって来たのか、ドイツではどんな暮らしをしていたのか、ドイツ人の彼氏はいるのかと、彼女達のグレーテへの興味は尽きないようだ。

駆狼は教室に備えられた時計に目を向ける。時刻は16時を少し過ぎた程度だ。

(あまり悠長にしているわけにはいかないな)

影狼に頼まれた校舎案内をしたいのだが、さて、グレーテに取り囲む彼女達をどうしたものか。

「はは。この町は閉鎖的だからか、凄い人気だな」

そこへ、弓人が駆狼の元に歩いてきた。

「梶田先生、これから職員会議じゃなかったんですか？」

「まあな。だけど、困ってる生徒を見過ごすわけにもいかないんでね

——皆！——

弓人が女子生徒達に声をかけると、彼女達は一斉にグレーテから弓人の方に視線を移す。

「何ですか、先生ー？」と全員首を傾げている。

「クロイツェルはまだ転校してきたばかりなんだ。あまり拘束しすぎるのも酷だぞ」

「えー、でもっとグレーテさんの事を知りたいんですもん！」

「それなら、明日でもいいだろう。人間関係は日々の積み重ねで築き上げられていくものだ、ゆつくり時間をかければいいんだよ」

弓人は「それに」と駆狼の背中を押す。

「明日空は遡夜生徒会長にクロイツェルの校舎案内を申し付けられるんだ」

「え、そうなんですか!?!」

女子生徒達は互いに顔を見合わせると「それだったら長話はできないね。明日空くんも忙しいだろうし」と早々にグレーテとの会話を切り上げる。

「じゃあ、グレーテさん！ 明日、絶対一緒にクレープ食べようね！」  
「了承、した」

女生徒達はグレーテに手を振ると、教室から走り去るように帰宅していった。

その様子を見届けると、弓人は屈伸しながら「それじゃあ」と声を漏らす。

「俺も職員会議に行くとするかね。明日空、しっかり校舎案内しとけよ」

「はい。ありがとうございました」

駆狼からの感謝の言葉を受け取り、用事が済んだので早々に退散する事にする。

だが、その前に一言だけ残す事にする。

「明日空。今日から7日間は満月週間だつて事、忘れんなよ」

「……はい」

その言葉に、駆狼は少し苦虫を噛み締めた表情を浮かべて返事をした。

「ここが体育館で、向かいが音楽館だよ」

その後、駆狼はグレーテを連れて校舎内の案内をひと通り行った。一学年から三学年までの各フロアの教室、二階の奥にある保健室、三階の西側にある調理室と理科実習室。

そして、体育館と音楽館。

特に体育館では剣道部の面々が部活中であり、副将の影狼の掛け声が響いていた。

「めえええん!!」

「つぐ!!」

影狼の一撃が当たり、見事に一本を取っていた。

その光景を駆狼は黙って見ていると、グレーテが口を開く。

「校舎案内は、これで、終わり……?」

「え……ああ、うん」

首を傾げるグレーテに対し、頷く。そこで改めて、駆狼はグレーテの姿を見つめる。

何の感情すらも映し出さない赤い瞳に、夕陽の光を反射する穢れない無垢な白髪。この日本では滅多にお目にかかれないであろう色彩に目が奪われてしまう。

「さっきの、満月週間、って……なん、ですか?」

「……満月週間」

その言葉を聞くと、いつもこの時期になって自分の中の何かざわつくことを否応なしに思い出してしまう。

「この夏川町は昔、隕石が落ちたことで有名なんだ。それが原因かは分からないけど、それ以降、夏の中頃になると7日間連続で満月が浮かぶ現象が起きるようになったんだ。だから、満月週間」

「……満月が、7日間連続で」

「ああ、普通あり得ないだろ? だからこの時期になるとたくさんのお客がこの夏川町にやって来るんだ」

この小さな片田舎の町も、その観光事業でなんとか成り立っているという状況だ。

「ただ、満月が7日間連続で出るだけじゃなく、夏なのに夜が長くなる

んだ、不思議なことに。だから、この満月週間では女性はなるべく早く帰宅するのがここの習わしなんだ」

「そう……」

グレーテは納得したのか、はたまたそうでないのか。とにかく相変わらず表情の読めないまま赤い夕空を見上げる。

「貴方も、早く帰った方が、いい」

空を眺めたまま、彼女はそう呟いた。駆狼も思わず「え？」と首を傾げてしまう。

「それは一体、どういうこと？」

「夜は、騒がしくなるだろうから……」

風で彼女の白い髪が靡く。赤い瞳は何も映さず、夕陽の光を背後に受けて小首を傾げるような所作で駆狼を見つめた。

そのどこか幻想的な光景に見惚れつつも、彼女の言葉で駆狼はどこか不安を抱く。彼女の言うとおりにした方が良いと本能が囁く。

—— だけれど。

「ごめん。今日は用事があるから、早くは帰れない。勿論、なるべく早く帰るようにはするけれど」

自分にはやらねばならないことがある。これは仕事でも何でもなく、自分の中の自分が求めたこと。

部活の助っ人に、放課後のバイト。

たとえ自分が発した警告であろうと、これを覆すことはできない。

「……………そう」

彼の言葉にグレーテは小さく頷いた。ただ、それは「警告はしたぞ」という意図があるように感じられた。

その真意は分からない。

彼女は自らの発言の意味を言うことなく、そのまま駆狼に背を向けて歩き出す。

「校舎案内、感謝、します」

ただそう言い残して。

駆狼もその背中を見つめるが、やがて彼女の進行方向とは逆の方向へと歩みを進める。

自分のやるべきことをやるために。望まれたことを望まれるがままに行動するために。

時刻は午後10時。学校での部活の助っ人を終え、放課後の喫茶店のバイトも無事終えられた。

「お疲れ様でした」

祖父の知り合いである人がマスターをしている喫茶店を後にした。駆狼は、辺りを見渡す。

周りはすっかり真っ暗で、人の気配が感じられない。

「痛っ……」

まただ。また、あの頭痛だ。頭を刺すような鋭い痛み、体の中から何かか奮い立つような嫌な感覚。

——戦え——

そんな声が聞こえるような気さえしてくる。何か、この内なる闘争本能を刺激するような感覚だ。

「早く帰って、寝るか」

幸い、今日の授業では課題は出ていない。帰宅したらすぐにシャワーを浴びて寝ることにしよう。

そう思って自宅に向かって歩みを進める。

建物が建ち並ぶものの、十分に舗装されていない道。少ない街灯。辺りに響き渡るのは自分の足音のみ。

もう夏だと言うのに、夜の風は妙に肌寒くどこか寂しい印象を与えてくる。

「……………お……………お……………」

そんな時、ふと人の声が耳に入ってきた。

その声は小さく、人の営みが溢れる日中ならば容易くかき消されてしまうようなぐらいいかに細いものだった。

普段なら通り過ぎていただろう。だがなんとなく、今回ばかりはそちらに足を向けるべきだと自分の中の誰かが告げた気がしたのだ。

ひと気のない路地裏に入り少し歩くと。

(あれは……)

一人の少女が魔法陣に立っているのが見えた。思わず身を隠したまま様子を伺う。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理ことわりに従うならば応えよ」

魔法陣から光が発生し、少女の周りを包んでいる。

(クロイツェル……?)

今朝、駆狼の学校に転校してきたグレーテがそこにいた。

彼女は駆狼に気づいた様子もなく、何者かを呼び出すための詠唱を淡々と紡いでいく。

しかし。

「悪いが、召喚前にリタイアしてもらうぜ」

凜とした少女の声、グレーテのものとは違う。グレーテと違い、もつと人間的な感情を含んだ声だ。

そう思った次の瞬間、グレーテの身が一本の青い槍に貫かれた。

「っ!」

駆狼は思わず駆け出した。何もかも意味が分からなかった。

彼女が槍に貫かれたことも、自分が駆け出したことも。

逃げるべきだ、何も見なかったことにして逃げるべきだったのだ。だが、それができなかった。

倒れる彼女を受け止め、駆狼は必死に彼女に声をかける。

「おい、しっかりしろ! 今、救急車を——」

救急車を呼ぶ。その言葉を口にできなかつた。何故か。

背後から首筋に突きつけられた黒い槍の先によつて、駆狼は身動きが取れないでいた。

「マスターから、目撃者は一人残らず殺せって話だ。運がなかつたな」  
「っ——」

声の主の姿を確認するために振り返ろうとした——が、それも早く声の主はグレーテの身から青い槍を乱暴に引き抜くとすかさず駆狼の心臓目掛けて黒い槍を刺し貫いた。

「——あ……っ!!」

貫かれた胸を押さえながら、駆狼はグレーテ共々地に伏した。

倒れた彼が見たのは、こちらを見下ろす赤い甲冑を身に纏つた黒髪の少女。

両手に青と黒の槍を携えた少女だつた。

(一体……何なんだ……)

それだけ確認して、駆狼の意識は暗転した。

「んじゃ、さつさと聖遺物を破壊すると——っ!？」

殺気を感じた甲冑の少女はその場から飛び退いて辺りを警戒する。

「テメエ……」

気づけば、倒れた駆狼の前に立つ一人の青年。白く長い髪に、目には目隠しの布が巻かれている。

青年は駆狼の体に触れると、自身の目元を右手で押さえながら「遅かつたか……」と呟く。それはどこか悔しげで、とても静かな怒気を含んでいた。

甲冑の少女は目隠しの青年に問う。

「何者だ!!」

「……」

青年は少女の問いかけに答えることなく、その長髪を両手の指の隙間で掴むと髪のを抜いていく。

指の隙間から地面に向かって垂れる髪の束。それを一振りすることで髪は瞬く間に十字架を模した刀剣である黒鍵に変貌した。

そのことに目を見開いた少女は、少しばかり口角を上げる。

「この気配、アタシと同じサーヴァントか。剣を使うからには、剣士とお見受けするが？」

「……そう言うお前は槍兵か」

赤い甲冑の少女——『ランサー』と目隠しの青年——『セイバー』は互いに向き合って己の得物を構える。

「いいねえ、この感じ。暗殺紛いな仕事は本来暗殺者が請け負うべきこと。こっちの殺し合いの方が性に合うって——っ!？」

「無駄口が過ぎるぞ」

セイバーは一気にランサーとの距離を詰めると黒鍵でランサーの二槍を弾き飛ばそうとする。

ランサーはそれに反応して黒い方の槍で黒鍵を受け止めると、青い方の槍を上空に向かって投げ飛ばす。

「疾走れ、急進！」

「っ！」

宙に投げ飛ばされた青い槍——『急進』はまるで意思を持つかのよう  
にその矛先が自然とセイバーの方を向くと、そのまま突進するかの  
ように急加速してセイバーに飛んでいく。

セイバーは一旦ランサーから距離を取って急進を弾き飛ばす。

弾き飛ばされた急進はそのままランサーの手に戻ると、今度はラン  
サーがセイバーに向かって突撃してくる。

「ぐ挨拶どうも！ 殺戮せ、殺戮者!!」

黒い方の槍——『殺戮者』がセイバーの心臓目掛けて飛翔してくる。  
「早くも宝具を晒すとは、不用心な奴め」

一方のセイバーは黒鍵を構えたまま、空中で回転するように飛び上  
がると、そのまま黒鍵を投げ飛ばす。

投げ飛ばされた黒鍵が空中で殺戮者と激突。互いの勢いが互いを  
相殺し合う。

黒鍵は碎け落ちるものの、殺戮者はランサーの手に帰還する。

そのことに、ランサーは目を見開いた。

「……どういうことだ？ その剣からは魔力のようなものは一切感じ



なかった。にも関わらず、殺戮者スロウターの勢いを完全に削ぐとは……」

「身体技術も極めれば伝説の武器に及ぶ。それだけの話だ」

「……言ってくれるじゃねえか」

自身の宝具を早々に晒したランサーと、まだまだ手の内を隠し通すセイバー。

そのことにランサーは久々の闘争心で沸き立つ。

「良いねえ、これだよこれ。これこそ、聖杯戦争つてもんだらうがー！」  
ランサーはまるで獣のように飛び上がり、セイバーへと攻撃を仕掛けていく。

ランサーとセイバーの戦闘が始まった一方で、倒れていたグレーテもまた再起動し、閉じていた目を開いた。

そのまま上体のみを起こして急進ダートに貫かれた箇所を確認。奇妙なことに血の一滴も出ていない。

「核への損傷甚大、作戦行動は可能」

そのまま辺りを見渡すと、立ち上がって魔法陣の上に置かれたままの聖遺物を掴み取る。

「損傷状況から『神衣テウルギアの起動』を断念。プランAを廃棄」

そうして、血を流して倒れている駆狼を見下ろす。

「プランB、『第三者の協力を得る』に移行する」

倒れている駆狼に近寄ると、彼の腹部に聖遺物『悪魔のベルト』を巻き付ける。

「反英霊『ペーター・スタブ』のベルトの装着を確認、詠唱を継続する」

彼の体を抱き上げ、魔法陣の中央に置く。

グレーテはぎこちない足取りのまま、中断していた召喚詠唱を口にする。

「誓いを此処に。我は常世ヒコヨサベ総ての善と成る者、我は常世ヒコヨサベ総ての悪を敷く者」

すると、その様子を目ざとくランサーが気づく。

「あの女、死んでなかったのか——くっ!？」

「彼女の邪魔はさせない」

ランサーの行く手を阻むかのようにセイバーが立ちはだかる。



その異様な光景に、さつきまでセイバーと戦っていたランサーは矛先を駆狼の方へ向ける。

「あの女、アイツに何しやがったんだ……？」

セイバーもまた、黒鍵の剣先を駆狼に向ける。

「運命は、変えられない……」

それは諦めにも似た切ない声音だった。

そうして、完全に駆狼の姿は人ではない異形にへと変わり果てた。

その容姿を一言で言い表すならば、まさに『灰色の狼男』と言ったところか。

グレーテはまるで諭すかのように、駆狼に命令を出す。

「私が貴方のマスター。行きなさい、怪物」モンスター

狼の咆哮が、ランサーとセイバーに迫る。

「!!!!!!」

けたたましい咆哮。

怪物はランサーとセイバーに迫るように駆け出す。

「なんだ、コイツは……」

「呆けてる場合か、武器を構えろ。彼を取り押さえろで、ランサー！」  
「わーってるよ！」

セイバーに言われ、急進ダイトと殺戮者スロウターを構え直すランサー。

とにかく、相手の素性が分からない以上、決め手となる殺戮者スロウターはなるべく使うわけにはいかない。ここはまず、急進ダイトで様子見及び牽制するのが常套だろう。

「まずは奴の動きを止める！ 疾走はしれ、急進ダイト!!」

急進ダイトを一度片手で回転させると、それをそのまま怪物に向かって投げ飛ばす。

放たれた急進ダイトはまっすぐに怪物を補足して直進していく。

しかし、怪物はそれを何てことないかのように急進ダイトを掴んでみせた。

「なにっ!?!」

ランサーにとって、急進ダイトは決して捕捉されない超速度の槍。

今までだって飛翔するあの槍を掴んでみせた猛者は見たことがない。

「狼狽えるな！」

そこへセイバーが黒鍵を急進ダイトに目掛けて投げ飛ばす。

怪物はそれさえも掴もうと黒鍵に触れた瞬間。

「グウ!?!」

まるで強い反発を受けたかのように後方へと吹っ飛んだ。その際に槍から手を放したために、急進ダイトはランサーの元へと帰還する。

(まただ。また、魔力を感じなかった)

帰還した急進ダイトを見つめながら、ランサーはセイバーの方を向く。

セイバーの投げ飛ばす黒鍵、何度見ても魔力を感じない。つまり魔術的なもので黒鍵を強化しているわけではないということ。

——身体技術も極めれば伝説の武器に及ぶ——

セイバーが発したあの言葉。身体技術による投擲方法であそこまでの威力を発揮する武術など聞いたことがない。

少なくとも、自分が生きていた頃の時代では。

さて、セイバーの黒鍵で吹き飛ばされた怪物だが、壁に激突してから動きがない。

「死んだのか？」

「いや、気絶しただけだろう。……さて」

セイバーは地面に落ちた黒鍵を拾い上げると、そのままランサーの首元に突き立てる。

「これ以上彼らに危害を加えるのなら、ここで消えてもらうことになるが？」

「……やめだ」

ランサーは小さく笑う。流石に分が悪く、何より手の内を晒しすぎた。

慌てなくても聖杯戦争はまだ始まったばかり、ゆっくり楽しめばいい。

「マスターの命令を遂行できなかったのは痛い、今晚はこれぐらいにしとく。1日目はどこも様子見だろうしな」

「……そうか」

ランサーから戦意が無くなったことを確認して、セイバーは剣先を下げた。

「それじゃあ、2日目の夜にまた会おう」

そう言っただけランサーは霊体化してその身を消した。

彼女が消えるのを見届けてその気配がこの周囲から離れたことを確認すると、続いてセイバーはグレーテに目を向ける。

「……なぜ、彼を巻き込んだ？」

彼とはすなわち、駆狼のことである。

「それが、最善と判断したから」

淡々と答えるその態度に苛立ちが沸き上がってくる。

「彼は魔術師じゃない。ただの一般人だぞ」

「だけれど、ベルトを巻かなければ彼は死んでいた」

グレーテの言葉。それもまた事実である。

駆狼はその心臓をランサーの殺戮者で穿たれた。

かの槍は勝利をもたらす殺戮の武器。一度殺すと決めた相手を必ず殺す。

心臓が穿たれた以上、駆狼を助けるには心臓に代わる延命装置が必要だった。

「……」

目元は目隠しの布で覆われて確認できないが、口元が強く噛み締められていることから、セイバーとしては相当複雑な心境であることが伺える。

「助けてくれたことには感謝しよう。だが、そこまでだ。これ以上、彼が聖杯戦争に関わることを見過ごすわけにはいかない」

「その言葉には従えない」

グレーテとしても、このまま引き下がるわけにはいかない。彼女にとっても、使命を帯びてこの聖杯戦争に臨んだのだ。

セイバーは黒鍵を握る手に力を入れるが、それをグレーテに振るおうとは思わない。……いや、振るえないの間違いか。

駆狼を聖杯戦争に巻き込みたくないというセイバーの思惑は、駆狼がランサーによって命を落とし、グレーテがそれを救った時点で既に詰んでしまった。

あとは、運命の赴くままに委ねるしかない。

「……そうか。それは残念だ」

黒鍵は再び元の髪の毛の束に戻って地面に落ちる。そこで、一瞬だけ満月が雲に隠れて辺り一面が暗くなる。

「セイバー……」

グレーテが言葉を溢した次の瞬間には雲が晴れて、再び満月の明かりで照らされる。

その時には既にセイバーの姿はなく、ここに残されたのは自分と駆

狼の二人のみ。

駆狼の元に歩みを進めてみれば、彼の姿は既に怪物から元の人間にへと戻っていた。

気絶したまま小さな寝息を立てて眠っているその光景に、グレーテはか細い声で呟く。

「……………ごめん、なさい」

〈ククク〉

黒く暗い闇の中で男の不気味な笑い声が響き渡る。

——誰だ？ 笑ってるのは誰だ？——

自分の姿すら確認できないその空間で笑い声の主に問いかける。

〈クク……クハハハハ〉

しかし、笑い声は問いかけに答えることなく、むしろこちらの反応を愉しんでいるかのように絶えず笑い続けている。

——お前は一体、誰なんだ？——

それでも尚も問いかけ続ける。少なくとも、今の自分にはそれしかできない。

ふと、誰かが自分の肩に背後から手を置いた。

振り返って最初に目に入るのは上空の満月。そして——

〈オレは……お前だよ〉

金色の瞳の灰色の狼男が、こちらを愉快そうに見つめていた。

「っ!？」

慌てて目が覚めて、辺りを確認する。

今日は7月2日、金曜日だ。

「今のは……」

駆狼は自身の額に手を当てると、汗でびっしょり濡れていた。ここは自分の自宅の一室。

昨日の自分は一体、何をしていた？

昨日の自分は一体、どうなった？

——マスターから、目撃者は一人残らず殺せって話だ。運がなかったな——

赤い甲冑を身に纏った少女の声。そうだ、自分は確か彼女によつて胸を槍で穿たれたのだ。

「傷は……無い」

穿たれたはずの場所に特に傷跡はない。なら、昨日のアレは一体……。

「昨日のは、夢……？？」

確かに、現実にしては些か荒唐無稽だ。夢だったのだと結論付けるのが一番しっくり来る。

きつと、いつものとはタイプの違う悪夢を見ていたに過ぎない。

だが、そう思う一方で「本当に夢だったと簡単に片付けてよいのか？」という疑問も強く沸き上がってくる。

——ピンポーン——

そんな時、インターホンの音が鳴った。

ひとまず答えの出ない思考から離れて現実に立ち戻る。

時計を確認してみれば時刻は七時。いつも通りの時間だ。

さっさと寝間着から制服に着替えて学校へ行くための身支度をする。あれは夢、あれは夢。自分にそう言い聞かせながら。

洗面器で顔を洗う。

〈本当に、そうかな？〉

「——っ」

ふと洗面器から顔を上げて鏡を見る。



〈本当は、気づいているんだろ?〉

金色の瞳をした自分が、微笑んでいた。

「っ!」

慌てて少し曇っていた鏡を拭う。今のは、本当に自分か?

曇りかけていた鏡面が鮮明になり、改めて自分の顔を見る。

瞳は禍々しい金色ではなく、いつも通りの青色。表情も微笑んでなく、焦燥に染まっている。

「あ、あはは……寝ぼけてたのか」

そうだ、きつとそうに違いない。そうに違いないんだ。

あんな夢を見るから、あんな幻覚と幻聴に襲われるんだ。何もおかしなことなんて、ないんだ。

平静を取り繕うように、自分に言い聞かせる。でも、どこかで誰かがそれを嗤ってるような気もした。

「やあ、おはよう 駆狼。どうした、顔色が悪いじゃないか」

「影狼……。おはよう」

扉を開ければ、そこにいたのは影狼ただ一人。駆狼は辺りを見回す。

「あれ、水芭先輩は?」

「ああ、昨日のバスケット部の部活動中に足を捻ちつたらしくて、養父ちちが学校まで送っていくことになったんだ」

「なるほど……」

ならば、暫くは三人での登校も難しくなるだろう。そう思いながら、駆狼と影狼は共に歩きだした。

いつもと変わらない道と風景を二人で歩いていく。そんな中、先に口を開いたのは影狼だった。

「ところで 駆狼、転校生はクラスに馴染めそうかい?」

「ああ。昨日もクラスの女子達とクレープを食べにいく約束をしていた」

誰もグレーテに対して拒否反応を示すような人間はいない。きつ

と、うまくやっていけるだろう。」

「それは何よりだ。なんせ、うちの学校で海外の生徒を編入させるのは前例がないからね。生徒会長として、それだけが心配だった」

「皆、夏川町の外には強い関心と憧れを持つてる。クロイツェルに危害を加えようなんて考えもしないだろう」

「確かに、違いがないな。——なあ、駆狼」

自分の心配は杞憂だったと笑う影狼。それでいて、少し伺うように駆狼に問いかける。

「お前もいずれはこの町を出ていくのか？」

「……分からない」

ここから離れて外の世界に足を運ぶ。考えたことがなかったわけではないが、いまいち自分がそんな行動に出ることが想像できない。

「そう言う影狼はどうなんだ？」

「僕は……蘭花姉さんと一緒に教会の洗礼を受けるからね。この町に留まるつもりさ」

「そうか。そういえば、そうだったな」

駆狼と影狼と蘭花は16年前に起きた大規模震災により親を亡くし、その後影狼と蘭花の二人はこの夏川町にある『夏川教会』に養子として引き取られた。因みに駆狼だけは父方の祖父の元へ引き取られたが、その祖父はもう5年以上も前に亡くなっている。

とにかく、彼ら二人は高校卒業と同時に教会の洗礼を受けるのが決まっている。

ならば、自分はどうすべきなのか。彼らと共にこの町に留まるのかもしれないし、一人だけ外の世界に赴くかもしれない。

やはり、答えは出なかった。だから、つい問うてしまう。

「影狼はどうして洗礼を受けようと思ったんだ？ 洗礼を受けずにもっと自由に生きる道もあったはずだろう？」

「……そうだな、そういう選択も確かにあったんだろうけどさ」

少し考え込むように影狼は「んー」と唸ると、納得のいく答えが出たのか、口を開く。

「結局、僕はこの町が好きなんだと思う。駆狼と蘭花姉さんと一緒に

過ごしたこの町が。だから、教会の関係者としてこの町を守っていくことは、僕にとつて何よりも代え難いことなんだ」

「……なるほど。羨ましいな」

明確な自分の答えを持つてることに、駆狼は純粹にそう思う。

そんな駆狼に対して、影狼は少し意地悪そうに言う。

「なら、お前も洗礼を受けるか？」

「それは——」

「言っておくが、お前が望むなら」ってのは無しだぞ」

駆狼が口から出そうになった言葉を先読みしたように、影狼が割り込む。

一方の駆狼は驚きからか目を見開くと同時に、影狼は「やっぱりな」と笑う。

「お前のそういう誰かのために行動できるところは美点なんだろう。でも、自分の未来ぐらいは自分で決めろ。誰かの意思に身を委ねすぎるな」

「——ああ、そうだな。……その通りだ」

影狼の言いたいことは凄く分かる。誰かが自分に託してくれた願いを、言い訳にはいけない。

それはきつと、自分にとつても相手にとつても、辛い結末しか招かないだろうから。

そうして歩いていけば、いつの間にか学校の校門前まで着いていた。

「おはよう、お一人さん！」

すると、校門前で停車しているバイクが一台あった。

乗っているのは蘭花、そして蘭花と影狼の養父である『ハメス・セルバンテス』だった。

ハメスは「おや？」と振り返って駆狼と影狼の姿を確認すると「おお!!」ととても嬉しそうな声を出す。

「駆狼くんじゃあないか！ 久しぶりだねえ」

ハメスの嬉しそうな声に駆狼は頭を下げる。ハメスは元々はスペ

イン出身の外国人で、20年ほど前からこの夏川町で神父として務めている男性だ。

気さくで裏表がなく、また町起こしのためにイベントを積極的に提案したりと大いに貢献したことから町中の人々から強く信頼されている。

異国から来たグレーテをクラスメイト達がすんなり受け入れたのも、彼の功績があつてこそだろう。

「お久しぶりです、セルバンテスさん」

「そんな他人行儀に畏まる必要はないぞ、少年！ もっとフランクに、親しみを込めて、ハメスと気軽に呼びなさいな！」

「いや、それは……」

このように、凄く押しが強い。どこかの誰かさんを彷彿とさせる。

「お養父さん、無駄だよ。駆狼ったら、私のことも『水芭先輩』って言うんだから」

「なに？ それはいかなあ、いかなぞ！ 駆狼くん!!」

ハメスにとつて、駆狼もまた大事な子供のような存在だ。気にかけないわけにはいかない。

駆狼が対応に困っていると、助け船を出すかのように影狼が会話に入ってくる。

「ところで、養父さん。蘭花姉さんを送ったのなら、早く教会に戻った方がいいんじゃない？ このままだと目立つし、何より朝の祈りの集會に遅れちゃうよ」

「オーウ、それを言われると痛いな。確かに、神父が不在のままでは祈りは始められない。駆狼くんとの談笑は、またの機会にしておくよ」

ハメスはそう肩を竦めて笑う。彼はとにかく人間関係を重視するタイプの人間で、座右の銘は『一期一会』。

特に影狼と蘭花が彼の養子になったにも関わらず、二人の名字がセルバンテスでないのは、ハメスが彼らの両親の意思を尊重したいということであり、そんなところからも彼の人となりが見える。

時間は朝の7時半。夏川教会で行われる朝の祈りは7時45分からだ。

影狼が蘭花に肩を貸してバイクから降りるのを手伝い、蘭花を無事に学校に送り届けたことを確認したハメスは再度バイクのエンジンを吹かす。

「それでは、勉強に励みたまえよ少年少女諸君！  
それではまたお会いしましょう！」

静かな田舎町の朝とは対照的な激しいエンジン音とハメス自身の「アーハッハッハッ！」という笑い声が響き渡る。

そんな光景に駆狼はポツリと漏らす。

「相変わらず濃い人だな、セルバンテスさんは」

「……」

駆狼の言葉に影狼と蘭花は何とも言えない表情を浮かべる。悪い人ではない、と言いたげなのが伝わってくる。

そこへ、コツコツと静かな足取りの足音が聞こえてきた。

ふと駆狼がそちらに目を向けてみれば、思わず身構えてしまった。

「……クロイツェル」

「おはよう、ゴッゴイマス」

歩いてきたのはドイツからの転校生であるグレーテ。

小首を傾げながらの、たどたどしい日本語。日本人とは明らかに異なる色彩を放つ存在。

視線をグレーテの顔から胸元に移る。昨日の槍が刺さった箇所は何事もないように見える。

その次に目に入ったのは、右手のみに着けられた白い手袋。たしか、昨日は特に手袋は着けていなかったはずだが。

「元氣そうだな……」

「はい」

「ところで、右手はどうしたんだ？ 昨日は手袋なんて着けてなかっただろ」

我ながら少し語気が強くなってるのを感じる。これでは尋問しているみたいだ。

問われた彼女は自身の右手を一瞥すると、淡々と答える。

「昨日、料理中に火傷したので」

「……。気をつけろよ」

本当に、そうなのか……？　そう問いたくなる気持ちをグツと抑えた。

そこで気持ちを一旦落ち着かせようとするが、どうしても心の底から沸き上がってくる疑念を振り払いたい衝動に駆られる。

本当に昨日のはただの夢なのか。自分もグレーテも無傷、そもそも昨日の出来事はあまりにも現実離れしすぎている。

だから、どうしても確認を取りたくなる。

「昨日の校舎案内の後、どこにいたんだ？」

「……ずっと、自宅ですが」

「そう、か……」

なんとも我ながら歯切れの悪い言葉だと思う。ほら、やっぱり夢じゃないか——そう思いたいのには、どうしてかしつくり来ない。

すると、駆狼になだれかかるように蘭花が「かわいいー！」とグレーテを見つめる。

「この娘が噂の転校生ちゃん？　ウサギみたいで可愛いね！」

「どうも」

グレーテは蘭花に軽く会釈をしてから自身の名前を告げる。

「グレーテ・レーナ・フランツィスカ・クロイツェル、です」

「……………うん、名前長いね！　グレちゃんって呼んでもいい？」

「お好きに、どうぞ」

「やった！　じゃあ、私のことは『蘭花』って呼んでね」

「はい、蘭花先輩」

グレーテの返答に蘭花は「これよ、これ。これぐらいの柔軟性を駆狼も見習うべきなのよ」と何度も頷く。それに対して駆狼は「そうですね」と心の籠っていない棒読みな言葉を漏らす。

そして、グレーテは影狼の方を向くと頭を下げ一礼する。

「昨日は、どうも」

「え……—ああ。いや、僕は特に大したことはしていないが」

影狼がグレーテにやったことは生徒会長としての軽い挨拶程度だ。

影狼としては、自分よりも駆狼の方が彼女の助けになっていると感じている。

「何か困ったことがあれば、僕や駆狼に遠慮なく言ってくれ。力になると約束しよう」

「私のことも先輩として頼ってね、グレちゃん！」

そう元気よく叫ぶ蘭花に影狼は少し呆れ混じりの溜め息を溢して、彼女の右足に巻かれている包帯を見つめる。

「先輩として頼られる前に、蘭花姉さんはまず利き足を治すことに専念した方がいいと思うけどね」

「うぐう……相変わらず一言多いわね、影狼くん」

口元を強く結んで恨めしげに影狼を見つめる蘭花。

「……」

一方の駆狼はそんな光景を無言で見つめながら、横目でグレーテを盗み見る。

昨日の出来事の真偽、彼女の素性。考えすぎだと言われればきつとその通りだろう。

でも。

（あれは、きつと……）

自身の刺された胸に手を当てる。

（あの時の痛みは、夢にしてはあまりにも）

心臓が潰されるような激痛、体全体の力が抜けていく感覚。あんな生々しさを果たして夢で見られるものなのだろうか。

——キーンコーンカーンコーン——

HR開始10分前を告げるチャイムが鳴る。周りを見れば、慌てて校門を通過する生徒の姿がチラホラと見受けられる。

蘭花は「やっばい！」と慌てる。

「早く行かないと遅刻になっちゃう！ 駆狼、影狼くん、また放課後ね！」

そのままけんけんの要領で自分のクラスまで向かおうとする。

今にもバランスを崩して倒れそうで見られないその光景に、影狼と駆狼は同時に駆け出す。遅れてグレーテも少しだけ早歩きで追いかける。

「蘭花姉さん、そんなに慌てると今度は左足も挫くことになるよ」

「無茶はしない方がいいです、水芭先輩」

蘭花の両サイドに立ち、それぞれが肩を貸す。そのことに蘭花は申し訳なさそうな声を出す。

「うう、めんぼくない……」

蘭花の言葉に幼馴染二人は「気にするな」と言わんばかりに小さく笑う。

すると、グレーテは両手を差し出す。

「荷物を持ちます、蘭花先輩」

後輩組三人の至れり尽くせりな行動に蘭花は思わず感激の声を漏らす。

「くう、良い後輩を持って私は幸せ者だなあ」

「よよよ」と泣く蘭花に影狼は「はいはい」と呆れた声を出す。

そんな二人のやり取りに駆狼は思わず笑ってしまう。

「なんか、三人でこうやって並ぶのが懐かしいな」

駆狼のその言葉に影狼と蘭花は目を見開く。まさか、彼の口からそんな言葉が出てくるとは思わなかった。

影狼は少し「やれやれ」と肩を竦める。

「昨日一緒に登校できなかつただけで懐かしいと言われてもねえ」

「ちよつと、影狼くん。あんまり茶化さないでよ」

そこでまた三人で笑う。自分達は16年前からずっと一緒にいる幼馴染。

誰が欠けても成り立たない、三人揃って初めて完成する関係だ。

そのことを思い起こさせてくれる言葉を、普段から自分の感情をあまり口にしない駆狼が言ってくれたことが、二人にとってとても嬉しいことであった。

「明日空、駆狼……」



そして、三人の様子を少し後ろで眺めつつ、グレーテは駆狼を見つめる。いや、正確には観察していると言った方が正しいか、それとも監視とでも言うべきか。

「テウルギア神衣との同調率、基準値以内を確認」

そのまま静かな足取りで三人について行くのであった。

時間は少し経って朝のホームルーム。弓人はクラス全体の生徒の名前を読み上げ、出席確認をしていく。

呼ばれた生徒は間髪入れずに「はい」と返答する。

そして、最後の生徒の名前を告げた。

「やりはらふたば槍原双葉、……槍原はいないか？」

あれほどテンポが良かった返答が返ってこず、件の生徒の席を見つめる。

その周りの生徒に目を向けても誰も存じ上げぬと首を横に振る。

弓人は「またか」と溜め息を溢した。

「どうせ学校内のどこかにいるんだろうが。……全く、せめて朝のHRには顔を見せてほしいもんだ」

とりあえず件の生徒は後で探すとしよう。そうして早々に出席簿を閉じて「さて」と仕切り直す。

「お前らも知ってるように昨日からこの夏川町は満月週間に入った。あまり学校に長居はせず、用事が済んだらすぐ家に帰るように」

クラス全員に言い聞かせるように言うと、所々から「でも部活がー」という声が漏れる。

「部活にのめりこむのは大いに結構。だが、それも程々にしておくことだ。特に、最近は失踪事件が多発している」

「……」

失踪事件。その言葉にグレーテは少しだけ反応した。あくまでポーカーフェイスを保っているが、先程よりも目が少し泳いでいた。

その様子を目敏く見つめていたのは駆狼だった。今朝から感じる彼女への不信感から、横目で密かに観察していた。

失踪事件と彼女は何らかの繋がりがあるようにどうしても思えて

しまう。それが直接的にしろ間接的にしろ。

「それじゃあ、朝のHRはこれぐらいにしておこう。起立」

そこで弓人が号令をかける。起立と言われたのでクラス全員が立ち上がる。

「気をつけ、礼」

『ありがとうございます！』

「うっし。じゃ、一時間目まで一時解散だ」

朝のHRが終わったことで弓人は早々に教室から出ていく。恐らく、出席していなかった双葉という生徒を探しに行ったのだろう。

さて、横目でそのまま隣席のグレーテを見れば、昨日の女生徒三人組に囲まれていた。

聞こえてくる会話からどうやら「今日こそクレープと一緒に食べに行こう」ということらしい。グレーテもそれに同意するかのように頷いている。

「おい、明日空ー」

すると、目の前に誰かがやって来た。名前を呼ばれたのでそちらに目を向けてみれば駆狼のクラスメイトだった。

「友也、か」

目の前にいた少年は『双ノ親<sup>にのちか</sup> 友也<sup>ともや</sup>』。オカルト研究部に所属している何とも風変わりな人物だ。

『友也、か』じゃねえよ！ 何度も呼んでるのにボーツとしゃがって。俺との約束、忘れてねえだろうな？」

友也にそう言われたので素直に頷く。

「ああ。柘田先生が言ってた失踪事件の調査だろう？」

「そう、その通り！ 今年は1999年、ノストラダムスの予言によれば今年で恐怖の大王が現れ、世界を滅ぼすという。この失踪事件は、そのことに関係していると俺はズバリ考えた！」

「考えすぎな気もするが」

「その油断が俺達の命取りになるんだ！」

友也は「いいか」と駆狼に懇切丁寧に自分の持論を展開していった。失踪事件とノストラダムスの予言の関係性について説明していく。

一方の駆狼はそれを適当に相槌を打って聞き流している。

「……お前、ちゃんと聞いてないだろ」

「聞いてはいるぞ」

「お前なーっ!!」

地方の片田舎の朝に友也の怒声が響き渡った。

その頃、駆狼達が通う学舎である集命高校の校舎裏。そこに佇む少女に、弓人が声をかける。

「槍原、こんな所にいたのか」

「……その名前で呼ぶんじゃないぞ」

弓人に振り返った少女——『槍原やりはら 双葉ふたば』は忌々しそうに睨み付ける。

「なら、双葉って呼べばいいか?」

「そういう意味じゃねえってことぐらい分かんのだろ。ブツ殺されてえのか、弓兵アーチャー」

「こら」

弓人は持ってた出席簿で双葉の頭を軽く小突く。

「痛っ!」

「女の子がそんな物騒な言葉を使うもんじゃないぞ。——それに、どこで誰が聞いているか分からないんだ、あまり軽はずみな言動も控えるように」

「……悪かった」

小突かれた頭を抑えるとそのままそっぽを向きながら謝罪する。

弓人は溜め息を吐きながら「分かれればいい」と双葉の頭を撫でるものの、双葉はそれをすぐにはね除けた。

「子供扱いすんな」

「生前含めてもお前の方が俺よりも300年ほど子供だと思っぞ」  
「うっせえ!!」

殴りかかろうとする双葉の拳を丁寧に片手で捌き、そのまま額に「隙あり」とデコピンを喰らわす。

「ぐおっ!？」

「お転婆なものも大概にしておけ。とにかく、今は学生として大人しく授業に参加しろ」

「くそが……誰がそんなママゴトしてられっか!」

すると、双葉は両手を構えようとする。しかし。

「っ!？」

弓人はすかさず足払いをして双葉を横転させ、彼女の顔を覗き込むようにして言う。

「宝具まで出そうとするのはナンセンスだぞ。それとも、ここで協定関係を解消するか?」

「……。覚えてろよ」

倒れていた双葉は立ち上がると、そのまま校舎とは反対の方向へと歩き出す。

「どこへ行く?」

「帰るに決まってるだろうが」

「それを今の俺が許すと思うか?」

曲がりなりにも、今は生徒と教師。生徒の非行を黙認するつもりはない。

双葉はうんざりしたように言う。

「どうせ、オレ達はあと六日で消滅する。意味なんてないだろ」

「六日しかないからこそ、第二の生を謳歌してみるのも手だと思うが」  
「ハッ!」

双葉は心底馬鹿にしたような表情で鼻で笑う。

「光の御子が聞いたら爆笑もんのことを言うんだな。真つ当な英霊なら、第二の生なんて望む奴なんかいやしないっての」

そう言って立ち去る彼女の背に、弓人は肩を竦める。

「逆だ、ランサー槍兵。英雄としてじゃなく、ただの人として今を楽しめばいいんだ。……そうすれば、少しは生前の答えを得られるかもしれないぞ」

どうせ聞こえやしない。聞く耳を持たない者にわざわざ忠告をす

る必要はない。

だがどうしても、弓人は双葉を気にかけてしまう。彼女の姿に、生前的のある人物が重なる。

「不思議なもんだな。双葉はお前と全然違うのに、どうにもお前の姿が頭に過る……なあ、アルジュナ」

遠い昔の過去。まさか自分がこのような数奇な運命を辿ると思わなかった。不意を突かれて呆気なく終わった我が生涯、結局失ったものは何一つ取り戻せず、世界に縛られるというこの体たらく。

今一度弓人は己の原点に立ち返り自分を見つめ直す良い機会だと、今回の聖杯戦争で感じた。だからこそ、この集命高校で教員として勤めている。

「……」

出席簿を開き、赤ペンでチェックマークを点ける。

「槍原双葉。本日も欠席、つと」

「——で、あるからして」

「……っ」

午前中の授業、科目は数学。教師の長つたらしい話に数人の生徒は居眠りをしている中、駆狼は激しい頭痛に襲われていた。

(頭が…痛い……。なんだ、この割れるような痛みは……っ!!)

今まで確かに発作的な頭痛に悩まされることはあったが、それでもまさかここまで酷くズキンズキンと拍動するような痛みが出たことはなかった。

そこでふと、教室の窓ガラスに視線を移す。

「っ!？」

そこに映っていたのは、金色の目をした自分。驚きからか目を見開いた自分だった。

そのまま思わず席から立ち上がってしまった。

「……明日空、どうかしたか？」

少々年齢を召した数学教師が不思議そうな表情を浮かべて首を傾げながら尋ねてくる。

周りも怪訝そうに自分を見つめていて、言葉に詰まる。

「え、あ……その……」

改めて窓を見ると、やはりいつも通りの目の色であった。

何か言おうと口を開き、言葉を絞り出す。

「ず、頭痛が酷いので……保健室行ってきます」

気づけば頭痛が治まっていたものの、それ以外に何か言えることなかったのでそう口にした。

数学教師は納得したように頷く。

「そうか。今の季節だと熱中症かもしれないしな、あまり無理はするなよ」

「ええ……お騒がせしました」

数学教師は「気にするな」と笑い、グレーテの方を向いて言う。

「クロイツェル、明日空の付き添いを頼めるか？」

「分かり、ました」

そう言われ、グレーテは駆狼の手を握る。

「ついて、来て」

そのまま手を引かれて駆狼は力無く歩きだした。教室から出る直前、友也が小さく声をかける。

「おい、大丈夫か明日空？」

「……ああ、ちよつと休んでくる」

「放課後、無理ならやめとくか？」

「いや、問題ない」

友也は不安そうな表情を浮かべたまま「なら、いいけどよ」と漏らす。

駆狼としては、彼との約束を取り止めるつもりは一切ない。それだけはやってはいけない。

友也との会話を切り上げ、グレーテによって保健室に連れて行かれ

る。

夏の日光が廊下を照らし、歩いているのはグレーテと駆狼のみ。

「体調が、悪いですか……？」

グレーテが唐突に口を開いた。

「いや……この時期になると毎年頭痛が出るんだ。今日のは、今までの中で一番酷いけど」

駆狼は素直な所見を述べた。

夏の時期というよりも、満月週間になると悪夢と頭痛に襲われる。それさえ過ぎればまた一年後まで治まるのだが。

特に今年のは自分でも異常だと思う。悪夢や頭痛だけでなく、幻聴や幻覚すら見え始めているのだから。

「なら、早く良くなると、いいですね」

「ああ……。そうだな」

駆狼は自分を先導して歩くグレーテの背を見つめる。この頭痛の酷さと幻覚と幻聴、そのどれもがこの少女が関係しているように思えてしまう。

確証はないが、不思議な確信がある。そんな奇妙な感情が体全体に渦巻いている。

「着い、た」

彼女の足取りが止まり、横の扉を見れば『保健室』という表記がある。

グレーテは扉を三回ほどノックすると、中から「どうぞー」という間延びした男性の声が聞こえてくる。

扉を開けると、保健室の奥の方で椅子に座っている白衣姿の男性――

―『術野<sup>すべの</sup> 太陽<sup>たいよう</sup>』が笑顔で出迎える。

「こんにちは、見知らぬ異国のお嬢さん。そっちは明日空駆狼くんだね」

太陽は二人を快く歓迎して、保健室内に入室するように手招きをする。

彼はその日本人離れた整った顔貌から女生徒達からの人気が高く、よく仮病で保健室を訪れる生徒も少くない。

「今日は一体どうしたのかな？」

「彼が、頭痛が酷いので、連れてきました」

「ふーん、なるほどねえ」

グレーテの言葉を受けて駆狼の方へ顔を向けてからベッドを指差す。

「頭痛が和らぐまで、そのベッドで横になつてるといいよ。ちよつと頭痛薬を探してくるね」

太陽の言葉を受けて、駆狼は指定されたベッドに腰かける。

席から立ち上がった太陽は、薬が収納された戸棚を開いて頭痛薬を探す。

一方のグレーテは駆狼を保健室へ送り届けたので、そのまま立ち去ろうとすると太陽が「あ、ちよつと」と声をかける。

「この用紙に名前とクラスを記入してもらえるかな。あと、入室時間ね」

「分かり、ました」

グレーテは領いて、手渡された用紙に所属クラスと自分の名前、壁にかけられた時計を見ながら入室時間も記載する。

「んーと。……おっ、あつたあつた頭痛薬」

「これ、どうぞ」

戸棚から頭痛薬を見つけた太陽に用紙を差し出す。

「おー、悪いね。……ふーん、グレーテちゃんか。良い名前だね」

「どうも」

グレーテから差し出された用紙を目を細めながら見て小さく笑う。

その用紙を机に置いて「ご苦労さん」と伝える。

「明日空くんは私の方で預かっておくから、もう教室に戻って大丈夫だよ」

「はい」

太陽に対して一礼すると、今度こそ保健室から退散する。

駆狼はそれを無意識に目で追う。機械的で規則正しい足音が響く。

保健室の扉が閉じた瞬間、太陽が駆狼の肩を軽く叩く。

「はい、お水とお薬」



「あ、どうも」

太陽から水の入った紙コップと薬を受け取ってそれらを飲む。

太陽は駆狼の額に手を当てて熱がないかどうか判断する。

「んー、熱はないかな。熱中症ではないだろうけど、気分が良くなるまでベッドで寝てた方がいいね。良くなったら、教室に戻って大丈夫だよ」

「はい、ありがとうございます」

「ん。もしかしたら疲れが溜まってるのがかもね。じゃあ、おやすみ」

駆狼はそのままベッドに横になって瞼を閉じる。確かにこここのころ部活の助っ人の掛け持ちに放課後のバイトで、先生の言うとおり、疲れが溜まっていたのかもしれない。

たまにはこうやって体を休めるのもありかもしれないと自分に言い聞かせて、大人しく眠りの世界に身を委ねることにした。

—— やった ——

—— やったぞ ——

—— オレは再び、この世に舞い戻ってきた ——

—— 今はコイツの中だが、いずれ全てオレのモンだ ——

声が届いてくる。意地汚く嗤い続ける男の声。

黒い泥の影が自分を追って来ているのが分かり、思わず駆け出す。

—— 逃げてもムダだぜ ——

—— なんてったって、オレはお前の中にいるんだからよオ ——

—— 大人しく身体を明け渡した方が楽だぜエ ——

本能が自分に告げる。その声に従っては駄目だと、捕まってしまうばもう後戻りできなくなると。

声の主はとても恐ろしい存在だ。それこそ、自分と対極に位置するような存在だと恐怖心が沸き立つ。

来るな、来るな。そう叫び続けているのに声は木霊せず闇の中に消えていく。

聞こえてくるのは不気味な男の嗤い声のみ。

光が見えない。どこへ逃げればいいのかも分からない。

そもそも、逃げているのかすらも怪しい。

そうこうしている内に、足が掴まれた感覚がした。

—— 捕まえたぜエ ——

足から這い上がってくる影。もがいても振り払うことはできず息苦しい窒息感に襲われる。

誰か、誰か。声にならない声で助けを求めろ。

誰か、 —— どうか。

そんな時だ。

闇の中で心地よい音色が届いてきた。

気持ちを落ち着かせるような優しい琴の音。聞いていて不思議と

気分が楽になってくるような感覚さえある。

気づけば、あれほど覆われていた闇の中に僅かな光が浮かび、それは徐々に大きくなっていく。

身体を侵食しようとしていた影すら消え、駆狼はその光へと歩きだした。

——ミーンミーン——

「——っ!？」

悪夢から飛び出すかのように、駆狼は上体を勢いよく起こして周りを見渡す。

場所は保健室。夕日の光が窓から室内を照らし、セミの鳴き声が聞こえてくる。

「おや、お目覚めかい? とは言っても、もう放課後だけれど」

そこへ、太陽が駆狼のもとへ近づいてきた。何故か、手元に琴を携えながら。

「あの……術野先生、その琴は?」

「ん、これかい? 何か悪夢でも見てうなされてるようだったから、気分が和らぐようにと弾いてたんだ。ほら、私って養護教諭だけじゃなくて音楽部の顧問もやってるから」

太陽は手に持っていた琴を一旦机に置くと、駆狼に尋ねる。

「気分はどうかな?」

「……はい、問題ないです」

「そうか。なら良かった」

「あの、ありがとうございます」

駆狼からの感謝の言葉に太陽は首を傾げる。

「何がだい?」

「いえ、その……術野先生が琴を弾いてくれなかったら、もしかしたら永遠に夢から覚められなかったような気がしたので」

実際、夢の中で琴の音が聞こえたことで闇と影はどこかへと消えていった。

もしあのまま琴の音が聞こえなかつたらと思うと……思わず寒気すら感じる。

「うーん……言ってる言葉の意味がいまいちよく分からないけれど、君の助けになったのなら幸いだ。あと、保健室の外で君のお友達が待ってるよ」

「……はい。本当に、ありがとうございました」

ベッドから降りて壁にかけられた時計に目を向けて時間を確認する。時刻は午後四時半、帰りのホームルームが終わって三十分ほど経過したぐらいだろうか。

駆狼は再度太陽に一礼してから保健室を後にするのだった。

「大丈夫か、明日空？」

保健室から出た駆狼をまず出迎えたのは友也。そしてその後ろに控えているのは影狼と蘭花だった。

「心配をかけてごめん」

そう謝る駆狼に影狼は溜め息を漏らす。

「だから言っただ。体を壊すことになる、って」

「ああ……次からは気をつける」

反省の色が見られない駆狼の言葉に影狼は少しイラツとする。

「気をつけるとかの問題じゃ——」

影狼が突つかかろうとした瞬間、蘭花が慌てて止めに入る。

「まあまあ、影狼くん。とりあえず、大事にならなくて良かったじゃないの……ね？」

「それは今回だけの話だ。このまま無茶な生活を続けるようなら、今度こそもつと大事になりますよ」

「うう……」

蘭花としては影狼の言い分はよく分かる。だが一方で、駆狼の意思も尊重したい。何とも板挟みなジレンマに悩んでしまう。

「影狼。もうこんな失態はおかさない、約束する」

「……」

駆狼の言葉に影狼が数秒押し黙る。厳しい面立ちで駆狼を睨み付

けていたが、やがて呆れたように「分かったよ」と呟く。

「その代わり、次は無いからな」

「ああ、肝に命じておく」

「そうかい……」

本当に分かってるんだか、分かってないんだか。少し不安になるが、影狼は友也の方へ向いて言う。

「友也。駆狼がもし無茶をするようなら、止めてくれよ。コイツ、目を離すとすぐ無理をするから」

「ああ、任せておけ！」

友也は大きく頷いてガッツポーズを浮かべる。その様子に影狼はとりあえず一息吐く。

とりあえず、お目付け役が一人でもいれば多少大人しくなるだろう。

「それじゃあ、駆狼。僕は蘭花姉さんと一緒に教会に帰るから、これで失礼させてもらうよ」

影狼の言葉に蘭花も「ごめんね」と申し訳なさそうに言う。

「怪我してなかったら、私も駆狼の手伝いをできたんだけど」

「気にしないで下さい、水芭先輩」

そして別れを告げた影狼と蘭花を見送る。

彼らが立ち去る姿を見ながら、友也が心配そうに駆狼に尋ねる。

「体調が優れないなら、別に日を改めてもいいんだぜ？」

「十分寝たからもう大丈夫だ」

「それなら良いが。……じゃあ、とりあえずクロックに行くか」

『クロック』とは駆狼が放課後にバイトで通っている喫茶店の名前だ。

駆狼もそれに頷く。今日はバイトのシフトが入ってないので、ゆっくりできるだろう。

そう思い、友也から鞆を受け取って二人は学校を後にすることにした。

学校から歩いて二十分ほど経過して午後五時。夏川町と隣町の境あたりにある喫茶店『クロック』。

昔馴染みの木造建築で、元々は駆狼の祖父が経営していたものを現在のマスターが引き継いでいる。

木でできた分厚い扉を開くと、扉に取り付けられたベルが「チリンチリン♪」と鳴り、中から二人の青年が出迎える。

「いらっしやいませー！」

「……いらっしやいませ」

元氣よく挨拶した金髪の青年と、少し無愛想気味な銀髪の青年。

「おー、クロウか。いらっしやい」

そして、彼らの後ろにはカウンター越しに控える茶髪の女性が一人。

彼女こそがこの喫茶店『クロック』のマスターである。

「こんにちは、ポエティカさん」

「どうもっす、ポエティカさん!!」

彼女の名前は『ポエティカ・アトロホルム』。イギリスからやってきた異国の女性である。因みに、駆狼が彼女をファーストネームで呼ぶかと言うと、ポエティカ自身が『アトロホルム』というファミリーネームで呼ばれることを快く思っていないからだ。

彼ら三人は、喫茶店の制服であるエプロンを身につけ、茶色のグローブを両手に嵌めている。

「き、きききき今日も良いお天気っすねー！」

「まあ、夏だからなあ」

因みに、友也はポエティカに対して好意を抱いているのか少し顔が赤らんでおり、彼女はその様が面白いのかニヤニヤと微笑んでいる。

ポエティカに挨拶した後、駆狼と友也は自分達を出迎えてくれた二人の青年にも挨拶をする。

「今日は客としてお邪魔します。ベルフェバンさん、アニムスファイアさん」

金髪の青年『アーノルド・ベルフェバン』は「ゆっくりしてってねー！」と軽い調子で言い、銀髪の青年『ヨハネス・アニムスファイア』は

「精々、騒いでくれるなよ」と素っ気なく返す。

その様子にアーノルドはヨハネスを小突く。

「こちら、ハンス。ウェイターなんだからもっと愛想よくしなよ。ほら、こんな感じに笑顔笑顔♪」

「知るか」

アーノルドがお手本とばかりに自身の満面の笑みを浮かべるが、ヨハネスは全く意に介せずそっぽを向く。

彼らの様子に友也が小声で駆狼に尋ねる。心なしか、少し警戒してするようにも感じられる。

「なあ、明日空。あの二人ってポエティカさんの何？」

「彼らはポエティカさんの知り合いらしくて、ここで居候しながら働いてるんだ」

「へー」

二人の声が聞こえていたのか、アーノルドが「はいはい！」と手を挙げる。

「ボクの名前はアーノルドっていうんだ、よろしくネ〜！ 気軽にアーニーって呼んでよ」

その後、「ほら、ハンスも自己紹介してあげなよ！」と背中を叩く。

ヨハネスは鬱陶しそうに「うるさい」と言っつて、ウェイターとしての業務に戻ろうとする。

その様子にアーノルドは両手を合わせて友也に謝罪する。

「ごめんね。彼の名前はヨハネスっていうんだけど、ハンスって呼んでいいからね」

「……おい、アーニー。勝手に俺の名前を教えるな」

ヨハネスに後頭部を叩かれ「あ痛っ!？」と呻く。

アーノルドが痛がっている内にヨハネスは呆れながらも、ポエティカに視線を向ける。

ポエティカは肩を竦めて言う。

「まだ客は来てないから、好きな席に座るといいよ。飲み物一杯分ぐらいならサービスするし」

「……では、お好きな席へどうぞ」

相変わらずの無愛想な表情でそう告げ、ヨハネスはカウンター裏の奥へと足を運んでその姿を消してしまった。

アーノルドは慌ててカウンター越しにヨハネスに言う。

「ちよつとハンス、なんで引つ込んだんじやうの?!」

「……俺は接客より紅茶を入れてる方が性に合ってる。それだけだ」

そのまま完全に裏方に徹してしまったヨハネスに文句を言うものの、ヨハネスは我関せずなのかその後一切の返答が無かった。

一方の駆狼と友也は適当な席に腰かけると、メニュー表を見てアーノルドに注文する。

「紅茶を一つください」

「あ、俺はポエティカさんが淹れてくれたコーヒーで!」

駆狼は紅茶、友也はコーヒー。アーノルドは「はいはい」と裏方のヨハネスに声をかける。

「早速、紅茶のオーダーが出たよハンス! ……あ、マスターはコーヒーお願いしまーす!」

「あいよー」

ヨハネスは相変わらず返答しないものの、ポエティカの方は返答してコーヒーを淹れるために自身でブレンドしたコーヒー豆が入った瓶を戸棚から取り出す。

すると。

「お邪魔しまーす!」

扉の鈴が「チリンチリン♪」と鳴りながら勢いよく開いた。クロツクに入店してきたのは四人の少女達で、内一人はグレーテだった。

駆狼は目を見開いた。

「クロイツェル——」

「はい、いらっしやいませー!」

アーノルドは心なしか先ほどよりもテンションが高い様子で少女四人を迎え入れる。しかしよくよく見てみれば、グレーテ以外の三人は昨日、グレーテを「一緒にクレープを食べよう」と誘っていた女生徒達三人だった。

「四名様、ご案内——! ……ハンスがいなくて良かった」



四人をテーブルに案内した後、顔は満面の笑みであるものの、グレーテの姿を一瞥してボソツと小声で心底安心したような聞き取れた。そのことに駆狼は首を傾げるが、特に追及しようとは思わなかった。

友也は入店してきた四人に声をかける。

「あれ、お前らも来たのか。なんで？」

声をかけられた者の内の一人が駆狼と友也の存在に気がつき、「双ノ親さんに明日空くんじゃん」とこちらに駆け寄ってくる。

「私達はグレーテさんと一緒に、このクレープを食べに来たの。そっちこそ、珍しい組み合わせじゃない？」

「俺は部活動の一環で失踪事件の調査、明日空はその助手だ」

「へえ。あ、でも、明日空くんは今日体調が悪いんだからあまり無茶させないでよ。双ノ親くと違って明日空くんは繊細なんだから」

「わーってるよ。つーか俺もそれなりに繊細だわい！」

友也が女子生徒と会話する中、駆狼はついつい目でグレーテを追っってしまう。

そんな中、「は、ハンス?!」というアーノルドの慌てた声が聞こえた後、目の前で荒々しく紅茶の淹れられたカップが置かれる。

そちらに視線を向けてみれば、眉間に皺を寄せてグレーテを見つめるヨハネスが立っていた。

そのあまりの鋭い表情に「アニメスフィアさん……？」と恐る恐る声をかける。

「……紅茶だ」

ヨハネスはそれだけ告げて早々に裏方に戻る。しかし、あの眼光の鋭さは異常としか言い様がない。あれはまるで家族の仇でも見ているかのようであった。

「ほい、コーヒー」

一方、友也の方へポエティカがコーヒーの淹れられたカップを置く。そして駆狼に言う。

「ヨハネスは少し腹の虫の居所が悪いだけだ。そんなに気にしなくていいよ」

「は、はあ……」

「それじゃ。ごゆつくり、お二人さん」

そう言って手を振って再度カウンターの奥に戻るポエティカ。アーノルドが「マスター、クレープ四つー」というオーダーを聞いて「あいよー、今作るわ」と返答して調理作業に入った。

そこで友也が駆狼に声をかける。

「やっぱいいよなー、ポエティカさん。美人だし、料理美味しい」

少し顔が緩んだ後、「ゴホン」と咳をして本題に入る。

「よし、じゃあまずは被害者の情報を纏めていくか」

そう言って、友也は鞆から失踪者のリストと夏川町一帯の地図を取り出して駆狼に見せる。

リストには失踪者の現住所と最後に目撃された場所と時間が事細かに記されていた。

「このリストを元に、この地図に情報を纏めていくんだ。リストの量が多いんで分担な」

「ああ、分かった」

事件の関連性が不明な案件も含めてるので、リストに記された失踪者の数は約二百名。

これを二人で地図に纏めていき、そこから実際に調査に向かう場所を厳選していく予定だ。

「お、なんか面白そうなことやってんねー」

そこへアーノルドが会話に参加してきた。

「ボクにも一枚噛ませてよ。マスターがクレープ作るまで暇だし」

そう言って適当にリストの束を駆狼から横取りする。

「三人でやった方が効率的だし、いいよね」

「ま、まあ手伝っていただけなら」

「よっしゃー」

友也からの許可を得て、三人で情報を地図に纏めていく。

失踪者が好発する場所は町の西側、時間は夜であることが多い。

駆狼はリストを見ながら呟く。

「謎の失踪事件。行方は掴めず……か」

この数ヶ月で起こった失踪者の数は約二百名。その一切の行方が不明であり、明らかに異常と言える。

失踪者の中には海外からの観光客も何人かおり、アーノルドは「ボクも気をつけなきゃな」と少し他人事のような呑気な風に言う。

作業開始から一時間。途中でアーノルドがクレープをグレート達に届けるために一旦離れたものの、地図に情報を纏めることができた。

やはり失踪者が多発しているのは町の西側、そのことに駆狼は眉間に皺を寄せる。

「夏川教会に近いな……」

影狼と蘭花とハメスの三人が暮らす夏川教会の近くであるということに、少しだけ心がざわつく。

三人が巻き込まれないことを、願うしかない。

「うーん、教会の関係者は大丈夫だと思っただけだねえ。……色々」と

ひと通りの作業が終わってカウンターの奥で暇そうに座っているポエティカの言葉に少し目を向けるが、すぐに地図に戻す。

他の被害場所を見てみれば、このクロック付近でも確認された。それも、あの路地裏で。

——目撃者は一人残らず殺せって話だ——

痛まない胸に思わず手を伸ばす。痛みは無いはずなのに、何とも息苦しくなる。

「……なあ、双ノ親」

「何だ？ 何か気になる点でもあったか？」

駆狼に声をかけられた友也は首を傾げる。

「何か目撃情報は、無いのか。不審人物、とか」

「失踪者を連れ去った犯人のことか？ ……うーん、残念ながらその手の情報は無いな」

「……そうか」

もし夢でないのなら、昨日の赤い甲冑の少女こそがこの失踪事件の主犯なのではないか。そしてグレートも、それに少なからず関わっているのでは。

その疑念からグレーテを見る。彼女は級友達と話に花を咲かせており、何度か頷いたり受け答えをしながらクレープを食していた。

「なんだ、気になっちゃう感じ?」

グレーテを盗み見ていると、ポエティカが視界に入ってきた。

「いえ、少し気になることがあって」

「ふーん」

ポエティカはそれ以上問うことはなかった。ただ、一言だけ忠告するように口を開いた。

「あんまり足を踏み入れない方が身のためだと思うよ、クロウ」

時刻は午後の八時半、場所は夏川町の中心部から少し東に位置した場所。

周りはもう暗く、空には満月が浮かび上がっている。

「……また、頭痛が」

響くような鈍痛に悩ませられながらも、駆狼は懐中電灯を持って町の巡回を行う。

友也が夜間の調査を行うために町内会会長と話を着け、夜間巡回の手伝いとして参加した。

駆狼は町の東側、友也は町の西側に分かれた。

そんな時。

~~~~~♪~~~~~

懐にしまっていた携帯電話が鳴った。日曜の朝に放送されている特撮作品のBGMだ。

取り出して通話ボタンを押して「もしもし」と電源に出ると、アーノルドの声が聞こえてきた。

「あー、クロウくん？　ボク、アーノルドだけど」

「ベルフェバンさんですか。何の用でしょうか？」

「いや、クロウくんって今家かな、って思ってたね」

「いえ、今は町内会の活動に参加して夜間の巡回をやっていますが」  
「……そう」

正直に言えば、少しアーノルドの声が曇った感じがした。だが、すぐにいつも通りの明るい声音に戻る。

「頑張りすぎるのもいいけど、そろそろ家に帰った方がいいんじゃない？　ほら、外ももう真っ暗だし」

「ええ、ですがまだ始まったばかりですし。ここの暗さにも慣れてますから大丈夫ですよ」

心配は無用と伝えるが、それでもなぜかアーノルドは食い下がってくる。

まるで言い聞かせるように「これ、クロウくんの同級生から聞いたんだけど」と前振りを言ってから本題を告げる。

「ねえ、『トンカラトン』って知ってる？　今、ちよつとしたブームなんだって」

駆狼は電話越しであるが、思わず首を傾げる。あまり耳馴染みのない単語だ。

「トンカラトン、ですか？　なんですかそれ」

「ボクもあんまり詳しくないんだけど」

同時刻、夏川町の中心部から西側。

「はあ、はあ、はあ……っ!!」

友也はひたすら走っていた。後ろから聞こえるのは低い呻き声。

「ト——カ——ト」

「来るな来るな来るなああ!!」

道の曲がり角を勢いよく左に曲がって公園に入り、茂みにその身を隠す。

必死に闇に潜む影に気づかれないように、息を殺す。

(間違いない、あれは……あれはっ!!)

どうか、このままどこかに行ってくれ。見逃してくれ。

茂みの中から顔を出さず、小枝の隙間から外の様子を窺う。

——ガサガサ——

少しずつ、足音が聞こえてくる。まるで何かを引き摺るような、重い足取りだ。

「——ト」

周りが薄暗いため、姿はよく見えないものの、やはり何かを口走っている。

「トン」

それは何かを探すように辺りを見回している。腰に納められた鞆に手をかける。

「トン」

そのまま鞆から刀を引き抜く。満月の光でその刀身が怪しく赤く輝いていた。

「カラ」

そして、むやみやたらに公園の遊具などをその刀で片っ端から斬り裂いていく。それはまるで、獲物が隠れる場所を一つずつ潰していくかのようだ。

「トン」

ある程度斬り裂くも、どうにも姿が見当たらない。ゆっくりと周りを見渡しても、見当たらない。

首を傾げると、そのまま公園から去るように足の方を変ええる。

場所的にはこちらに背を向けて去ろうとしているのが見えた友也は、思わず安堵の声を漏らす。

姿が完全に見えなくなったので茂みから出るために、立ち上がろうとした次の瞬間。

「——トン、カラ、トン」

背後から、そう聞こえてきた。